論　文　ニダバ (*Nidaba*) 35(2006), 95-104

「フィラー」形式に見る日本人母語話者の会話管理

―「日本語話し言葉コーパス（CSJ）」の「対談」場面分析を通して―

呉　　秦　芳

1 はじめに

『ACTFL-OPI　試験官養成用マニュアル』(Buck, K. 1989)では、中級上、上級の口頭能力の判定要素の一つとして、「フィラー」が取り上げられている。会話教育においてコミュニケーション能力が求められ、フィラーの必要性が重要視されているのである。「エート」、「アノー」、「ンー」のようなフィラー（注 1）は一見した印象とは裏なり、実はかなりきっちりとした使い分けがあり、コミュニケーションにおいて大きな役割を果たす。

「会話管理」については、メイナード（1993）は、「特に日常生活では、常に話者交替が実施されることでも明らかなように、話者同士がお互いに協力して会話の運営を管理していかなければならない。会話の相互管理のストラテジーとして当然問題となるものには、話者交替、あいづちなどの聞き手からの反応、種々非言語行動などが考えられる」と述べている（本稿では上の会話の相互管理のストラテジーを「会話管理」と略す)。

本稿では、この「会話管理」の中でも特に「フィラー」を取り挙げ、発話者がどのように話者交代を円滑に行っているかを考察したいと思う。現代日本語の大規模な自発音声データベースである国立国語研究所の『話し言葉コーパス』を利用し、その中の「自由対話」を選んだ。具体的な内容は、話題の制約なしに、10 分程度、自由に対話を行うものである。対話から得られた録音資料を文字化して、対談における日本人母語話者の「フィラー」をピックアップし、性別との関係から、その機能について探求する。

2．先行研究

先行研究では、「フィラー」について、談話の種類、発話・談話における位置、音声面での観察などの観点から研究がなされてきた。日本語母語話者のフィラーに関する研究としては、性別という社会言語学的視点から塩沢（1979)、Philips　(1998)などがある。

塩沢(1979)は「話の合間に入る『アノー』『エート』などの語で、話し言葉のみに使われる」ものをHesitation(注2)とし、成人男女・中学生男子・小学生男女・保育園児の談話に出現したHesitationを分析している。

Philips(1998)の研究は、日常会話・インタビュー・体験談を資料とし、フィラーについて「男性より女性、若年齢層より中高年層、インフォーマルな談話よりフォーマルな談話で使用される」との仮説を立て検証している。フィラーの頻度は談話の改まり度、年齢と関係するが、性別や談話の種類との結び付きは薄いとの結論が出ている。

塩沢（1979）及びPhilips(1998)とも一対一の対話におけるフィラーに主な焦点が当てられている。しかし、対話資料はテレビ、ラジオ、インタビューなど、話の形態は一致してないので、フィラーに関する知見は十分とは言えない。

このような状況を鑑み、本研究は『話し言葉コーパス』の対話における、性別に現れるフィラーの形式と機能に着目し、その使用実態などの様相から、会話管理のストラテジーを探る。この点に、本研究の特徴と独創性がある。

3．フィラーの定義と種類

本稿では、フィラーという用語の定義は基本的に山根(2002)の定義に従う(注1参照)。ただし、フィラーの種類については、本稿の調査結果からわかるように、実際に、文節間に挿入されるネ、ヨネは聞き手の反応をうかがう間投用法を持つものもあるから、本研究では山根の種類のほかに、これもフィラーの種類として付加する。

4.調査概要

(1)調査目的

日本語母語話者の自然な発話場面でのフィラーの使用実態と機能を明らかにし、性別との関わりを検討する。

(2)調査方法

泉子・K・メイナード(1993)のタイプ(5)の方法、「ある一定の対象者を選んで研究のために集められた会話で、研究者又は研究に関係のある者が参加したもの」(注3)を本研究では、日常会話が研究の目的であり、性別差によるフィラーの形式と機能の相違を見るために採用した。本調査は『話し言葉コーパス』の対話を録音し、文字化したものを調査対象とした。性別により、どんな形式、どんな機能のフィラーが用いられるかを調査した。本稿では、データに現れたフィラーの機能に焦点を絞り、各種のフィラーが談話の中で現れてくる位置、談話の内容との関わりから、日本人母語話者の会話管理を明らかにしようと試みた。フィラーの文法機能の判定についての手続きは、筆者のほかに、博士課程に在

籍している、日本語母語話者二人に判定してもらうことにした。

(3)調査対象

①『日本語話し言葉コーパス』とは

『日本語話し言葉コーパス』(英名はCorpus of Spontaneous Japanese;これを省略してCSJ と呼ぶ) は、国立国語研究所、通信総合研究所、東京工業大学の三者が共同開発した現代日本語の話し言葉研究用のデータベースである。自発性の高い独話 (モノローグ) を主対象としており、学会等における口頭発表の音声300時間分 (以下「模擬講演」)、その他 (インタビュー・対話・朗読など) から構成される。

CSJには、次に挙げるような様々な研究用の情報が付与されている(注4)。

転記情報:発話内容を文字化した資料。言いよどみやフィラーなどに関する情報も付与。漢字仮名混じりで表記した基本形と、発音を可能な範囲で忠実に表記した発音形の二種類から構成。

形態論情報:単語境界と品詞の情報。長めの単位の二種類を採用。短単位では「国立/国語/研究/所/に/つい/て」と細かく分割するのに対し、長単位では「国立国語研究所/について」のように複合名詞や複合辞などを認めて長めに分割。

文区切り情報:述語句を境界とした意味的なまとまりである「節」を中心とした単位。

分節音情報:音声に含まれる母音や子音などの文節的単位の境界時刻とその種類に関する情報

韻律情報:アクセントやイントネーションに関する情報。日本語音声用の韻律ラベリング体系であるJ_ToBI(Venditi,1997)を、自発音声用に拡張したX-JToBI(Maediti,2002)を利用。

話者情報:生年代・性別・出身地などの情報。

主観評定値:発話の自発性や改まり度など、講演に関する様々な観点からの主観的な評定値情報

表1 CSJに取材したデータについて

グループ / ファイル	女—女	女—男
	D03F0008	D03M0004
	D03F00040	D03M00017
	D03F00036	D03M00037
	D03F00045	D03M00048
	D03F00058	D03M00053

表2　各年齢層における使用するフィラーの形式と頻度（述べ回数）（対談のデータにより）

	項目／ファイル	母音の挿入	文節間に挿入されるネ、ヨネ	マー	ネ	アノ (注6)	ソノ	エート (注7)	コウ	ウーン (注8)	ナンカ	その他 (注9)	総数
女―女	D03F0008	8	14	15	0	1	4	9	1	9	1	5	67
	D03F00040	8	37	2	1	14	0	1	2	12	1	11	89
	D03F00036	8	4	5	1	45	1	13	2	46	2	14	141
	D03F00045	7	10	6	0	2	0	0	1	11	9	2	48
	D03F00058	16	7	3	0	6	1	1	1	20	20	3	78
	総計	47	72	31	2	68	6	24	7	98	33	35	423
女―男	D03M0004	22	0	21	0	37	14	10	0	30	10	12	156
	D03M00017	39	1	3	0	3	0	13	0	12	5	2	78
	D03M00037	18	25	35	0	25	5	2	3	14	1	3	131
	D03M00048	12	60	13	1	22	21	0	0	7	3	3	142
	D03M00053	8	4	29	0	5	6	0	0	1	1	4	58
	総計	99	90	101	1	92	46	25	3	64	20	24	535

表3　各年齢層における使用するフィラーの形式と頻度（単位%）（対談のデータにより）（注　10）

	項目／ファイル	母音の挿入	文節間に挿入されるネ、ヨネ	マ-	ネ	アノ	ソノ	エート	コウ	ウーン	ナンカ	その他	総数
女—女	D03F0008	12	2	22.4	0	1.5	6	13.4	1.5	13.4	1.5	7.5	100
	D03F00040	9	41.6	2.2	1.1	15.7	0	1.1	2.2	13.5	1.1	12.4	100
	D03F00036	5.7	2.8	3.5	0.7	31.9	0.7	9.2	1.4	32.6	1.4	9.9	100
	D03F00045	14.6	20.8	12.5	0	4.2	0	0	2.1	22.9	18.8	4.2	100
	D03F00058	20.5	8.9	3	0	7.7	1.3	1.3	1.3	25.6	25.6	3.8	100
	総計	11	17	7	0.4	16	1.4	5.7	1.7	23.2	7.8	9	100
女—男	D03M0004	14.1	0	13.5	0	23.7	9	6.4	0	19.2	6.4	7.7	100
	D03M00017	50	1.3	3.8	0	3.8	0	16.7	0	15.4	6.4	12.6	100
	D03M00037	13.7	19.1	26.	0	19.1	3.8	0	16.7	0	0.8	2.3	100
	D03M00048	8.5	42.3	9	0	15.5	14.8	0	0	4.9	2.1	2.1	100
	D03M00053	13.8	6.9	50	0	8.6	10.3	0	0	1.7	1.7	6.9	100
	総計	17.5	15.9	17.9	0.2	16.3	8.1	4.4	0.5	11.3	3.5	4.2	100

5. 結果と考察

5.1 量的分析

『話し言葉コーパス』の「自由対話」を談話資料として、女性と男性が用いるフィラーの種類、またその機能を分析し、性別に見た日本人のフィラーの使用実態を探るべく、性差に着目し、フィラーついての量的分析を行った。フィラーを性差に関して形式別の使用頻度と使用率を見たものが表2と表3である。表3における括弧中の数字は、女性と男性での、各フィラーの使用される割合（%）である。

表2と表3を概観すると、以下のことが明らかになった。まず、フィラー形式のうち、言語形式は性別によって差異が見られる。本調査では、「ウン」は女性において顕著である（23.2%）。逆に、男性の使用率は女性の半分以下（11.3%）だった。また、男性では「マ」が圧倒的に多いのに対して、女性においてはその「マ」が少ない。男性に比べ女性は、「ナンカ」、「その他」を多用する傾向があるが、女性より男性の方が、

「ソノ」を多く用いることが見られる。さらに、男性、女性を問わず全般的に見られるのは「アノ」、「文節に挿入されるネ、ヨネ、サ」、「母音の挿入」である。

このように、フィラーは、性別ごとに異なる特徴を持つものと見なすこともできると考えられる。

次に、「ウン」、「マー」、「文節＋サ、ネ、ヨネ」、「ナンカ」、「その他」などの文法機能について以下の質的分析を通して明らかにする。

5.2 質的分析

この項では、談話内容との関連という点から、今回の談話データから現われるいくつかのフィラーの機能を明らかにしていきたい。

5.2.1「マー」の機能

男性において「マー」は頻出する。「マー」の機能としては、「間を持たせる」時に発する「マー」(例 1)、予告の働きをする「マー」などと、前後の文脈により異なる働きを持っていることがわかる（例 2)。

（例１）(D03M0053 のデータにより）(L：女；R：男)

L:ウーン、どのぐらい、コノ
R:アノ、レジュメを書くのに
L:エー
R:時間は掛かりました。ソウスネ、一応話す内容を考えるのは
L:ウーン
R:マー、行き帰りの電車の（D？ン）中で

（例 2）(D03F00017 のデータにより）(L：女；R：男)

L:そうは見えないんですけど、エーット、じゃ、久しぶりに国研に来てどうでしたか。
R:エー、だいぶ人が入れ替わっていて。
L:ハイ
R:ンー、マー、部屋も白くなったし。
L:アー、そうですね。大きな変化ですね。
R:黒い部屋がウーン、色々と。

文脈で示したように、(例 1) の「マー」はつなぎ、「間を持たせる」機能を持っているが、(例 2) の「マー」は予告の働きをしていることがわかる。

5.2.2「文節+終助詞（ネ、ヨネ、サ)」 の機能

ここでは、なぜ女性が男性より、「文節+サ、ヨネ、ネ」の使用が多く用いる

のか談話データによって考察したい。

（例 3）（D03F00036 のデータにより）（L：女；R：女）

L:ウーン、ウーン R:発達心理、青年心理、後、何だっけ、結婚心理、 L:フーン R:心理学 L:そんなにいっぱいあるんだ。 R:それを（D とっ）、ウン、六個 L:へー R:取って、ちょっとまだいっぱいあるんですけど$\boxed{ネ}$。ちょっとまだいっぱいあるんですけど$\boxed{ネ}$。でも、犯罪心理ってやってみたいです$\boxed{ネ}$。 L：ア、何となく何でっていう。

（例 3）の例文からは、それは話の区切りをつけ、当該文節を強調し、適当なポーズの役割を果たしつつ、前の話しの内容を確認しながら自己納得の機能を持っていることが窺える。つまり、文節に後接する「終助詞（ネ、ヨネ、サ）」は文末詞として用いられるものだけではなく、上の例 3 で述べたような、文中に挿入されて聞き手の反応をうかがう間投的用法を持つものもある。聞き手に対する確認や伝達に関わる機能も持っているから、これらのフィラーは間を取ること以外に重要な情報価値をも併せ持つと考えられる。

このように、女性は男性よりそれを用いる理由は、相手が自分の話を理解しているかを確認しながら、短い文章を細切れにして、少しずつ話題を展開していくからである。その確認のためには、相手のあいづちや話し手の確認の言葉「ヨ、ヨネ」などは有効であるだろう。それらを用いることによって、相手が理解していなければもう一度話すということが可能となるわけである。それは、男性より女性の方が、相手に配慮して言葉遣いを選ぶのではなかろうか。

5.2.3「その他（チョット、ダカラ、ナンダロウ(ネ)）」の機能

「その他(チョット、ダカラ、ナンダロウ(ネ) 」のように、その語の本来の意味を希薄化して使われた形副詞の間投詞的用法もあった。今回のデータによれば、このような現象は何箇所にも見出された。

（例 4）　（D03F00040 のデータにより）（L：女；R：女）

（前略）
L:そうなんだ。（息）
R:逆にでも東京でそれやると何、何だあの目立ちたばかりはって。
L:凄い、ウーン。
R:反感買うけど。
L:そうかも
R:（D お）、大阪ではそれをお互い温かく受け止めるっていう。
L:（笑）
R:もう人種が違いますよね。全くね。
L:ナンデショウネ。不思議ですよね。
R:ナンデショウネ。ウーン。
L:私も本当にそう思ったな。今回行って何が違うんでしょうね。
R:ヤッパシネ。東京ってネ、日本全国から。

（例 4）の R 女は「ナンデショウネ」、「ヤッパシネ」を使うことにより、自分の意見を強く主張したり、防衛したりする心理の現れだろうと考えられる。このような副詞の、談話における「間投的用法」が、強調、間つなぎ、やわらげ、ぼかしといった働きをしていることについて、『副詞の意味と用法』では中田（1991）が記述している。

6. まとめ

以上の量的・質的両面からのフィラーの分析・考察を行った。量的分析においては、フィラーの種類と性別との関わりを分析した。

質的分析により、実際の会話の中で使われるフィラーは、「間を取る」と「談話内容の価値を表す」という二つ機能を持つことがわかる。「間を取るためのフィラー」が用いられるのは、やはり、話者自分の考えをまとめて言葉にすることが容易なことではないからである。話している最中に思考する時間も必要である。突然思い出して、声を上げることもある。また、自分が話していることが相手に本当に通じているのか気になったりもする。つまり、「フィラー」は文章のリズムを取ったりするために用いられるのではなく、相手の反応が気になったり、自分が言葉につまった時に、素直に出てくるものである。決して調子を取るために無意味に用いられたりするものではない。

7. 終わりに

本研究では日本語の談話の中において、量的、質的両面からフィラーを捉え、それの傾向と働きを解明することを目的とし、日本語話者における「フィラー」の調査を行い、分析、考察した。ただし、本論文では、データより浮かび上がった機能を、会話管理における談話調節機能の視点から分析したため、フィラーの意味論的機能、語

用論的機能に関することも明確にしなければならない。なお、本論文で述べた機能の細分化及び機能間の関連づけが妥当であるかどうかについては検討の余地がある。さらに、今回の録音資料が、性別を中心としたものであるため、「フィラー」の使用に関しての世代差、出身地という問題も残る。今後データの拡大を図ると共に、世代差、出身地におけるフィラーの調査も欠かせない。人間の言語行動を明らかにするためには、様々な要因を考慮して、データとなる会話をさらに深く、細かく分析していかなければならない。

注

1)フィラーの定義に関して山根（2002）に従い、つまり、フィラーとは、「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係・修飾関係にならない、発話の一部分を埋める音声現象」を指す。
2)塩沢(1979)の論文で指しているHesitationの役割は、沈黙をさけるためのはたらきに限られている。
3)泉子・K・メイナード(1993)p.62~63参照
4)このほか、係り受け情報、談話構造情報などの付与も検討している。また文区切り、文節音・韻律・係り受け・談話構造情報は、コーパス全体ではなく、四～五十時間の「コア」と呼ばれる部分にのみ付与される。コーパス設計の詳細は（前川他2000・2001）を参照されたい。なお、主観評定値については、新しい評定値尺度・方法のものを現在作成している。
6)その他、「アノー」の形もあるが、本研究では「アノ」で統一する。
7)その他、「ント（ー）」「ット（ー）」「エト」等の形があるが、本研究は「エート」で統一する。
8)その他、「ウーン」等の形があるが、本研究では「ウン」で統一する。
9)「その他」のフィラーは「(チョット、ダカラ、ナンダロウ(ネ)」などを指す。
10)個人の各フィラー使用割合は%で示している。

参考文献

有賀千佳子(1993)「対話における接続詞の機能について－それでの用法を手がかりに」『日本語教育』79号 日本語教育学会

後藤斉 (2003)「言語理論と言語資料－コーパスとコーパス以外のデーター」『日本語学』明治書院

斉藤俊雄他（1998)『英語コーパス言語学』研究社出版

牧野成一・鎌田修・山内博之・斎藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子（2001)『ACTFL OPI入門日本語学習者の話す力」を客観的に測る』アルク

中田智子（1991)「発話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』第10巻第10号

エメット啓子 2001「なんか」―会話への積極的参加を促す インターアクションマーマ―『言語学と日本語教育Ⅱ』南雅彦・アラム佐々木幸子共編 くろしお出版

池上嘉彦 1983「テクストテクストの構造」『談話の研究と教育』国立国語研究所

加藤好崇(2000)「日本人母語話者と日本語学習者のインタビュー場面における言語管理の研究」『東海大学紀要 留学生センター』20巻

川上恭子（1993)『談話における「まあ」の用法と機能（一）―応答型用法の分類―』『園

田国文』14
_____ (1994)『談話における「まあ」の用法と機能（二）—展開型用法の分類—』『園田国文』15
小磯花絵（2003.4）「コーパスによる音声談話の研究」『日本語学』明治書院
松浦和美(1996) 「日本語の談話における filler に関する研究」『教育学研究紀要』第42巻 第2部 中国四国教育学会
村岡英裕（1999)『日本語教師の方法論—教室談話分析と教授ストラテジー』凡人社
Philips, M. K. 1998DiscoursemarkersinJapanese:connectives fillers, and interactional particles. unpublisheddoctorialdissertation, Michigan State University, East Lansing, MI
日本語記述文法研究会（2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』くろしお出版
林淑璋（2005)「談話標識としての「それで」・「だから」と「じゃ」—整合関係を示す機能 の比較—」『2005當代認知語言學與日語研究創新研討會論文集、台北』
Senko, KumiyaMaynard. 1987. JapaneseConversation:Self-contextualization through Structure And Interactional Management
塩沢孝子(1979)「日本語の一 Hesitation に関する一考察」『ことばの諸相』F.C.パン堀素子編 p.151-166
梶村明子（2004)「自己発話力」を伸ばすことを目的としたタスクデザイン～コミュニケーション積み上げ型学習～『日本語教育学会春季大会予稿集』149-154
鈴木佳奈 2000 「会話における『なんか』の機能に関する一考察に関する一考察」『大阪大学言語文化学』Vol.9
滝浦真人 2004「つなぎ言葉の効用」『月刊言語』11月号
田中敏 1993「休止の意味論」『月刊言語』Vol.22 No.8
山根智恵（2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版
山下暁美（1990)「話し言葉におけるいわゆる無意味語」『講座日本語教育』第25分冊 早稲田大学
吉田妙子（2002)『日本人の「一人話」分析試論—中級から上級への会話指導のために』台湾日本語文学報会17